

註、与座岳一帯を焼いた場合、蜂の巣のように穴のあるタンクを持った飛行機がガソリンを撒き、霧雨みたいに降ったかと思つた瞬間に、山全体が同時に火となった、という談話があつた。国吉も与座岳を焼き払うのと同じ方法であろう、逃げることでできない火の廻り方で、一種独特のやり方があるようである。機銃した後は、焼き払う方とは別に、逃げ出す避難民を射撃していたものと思われ。それでぎっしり入っている避難民は、ほとんどがそのまま焼けて死んだし、逃げ出たのは機銃掃射でやられるという惨劇が想像される。

答 「その当時、弾は来ても逃げ隠れしようという気持もなかったという話もききましたよ。その人は、アメリカが出て来い、出て来いといつても床下にひそんでいて出なかつたらしいですよ。それで出て擱つた連中は、男の方は全部並べて小銃で射殺したという話をしています。その人は泊の人だが床下に隠れていたが、小銃で床下や天井なども撃っていたが運よく助かつて、その晩に逃げたと話していましたよ」

答 「その理由は、わたしも申し上げようと思つていたのですが」

註、以下バックナー中将の戦死と関連して話されるが、われわれが真栄里で調べた結果、バックナー中将の戦死とは関係ないのが正しく、バックナー中将戦死前のことで、話が矛盾している。バックナー中将戦死の地である真栄里部落では、そういった事実がない。国吉での米軍の集団射殺云ぬの話は、もっと正確に明かにしなければならぬ。夫を助けるために、赤ん坊まで男

わけですね」

答 「そうです」

答 「部落内の疎開者の心得のいい特徴がありますがね、うちの屋敷の後にですね、今は改造してありますが、あの当時は改造してない、こっちは相当材木がありました、その中に二人くらいは持つことのできない石があつたですよ、以前はなかつたですがね、うちらも当時は体力もなかつたので取つてのけることができませんで、そのまわりだけに野菜なんか植えました……」

註、以下話が切れるが、この石の下に人が埋葬されていて、野菜がよくできたし、後で遺骨が出た、ことを考えると、多分遺骨の目標の石なのにその遺族が来ない、したがって一家全滅したのではないかと想像ができる。発言者は区長の神谷晴順さんなので、話の終結を聞かして貰うことは可能である。

神谷良儀(三十九歳) 第二次防衛隊

第二次の防衛召集は、軍司令部から各村へ来て、各村から召集されたんですね。召集されて、山の三四八一部隊に入隊しました。場所は与座岳で、入隊するときはから塚掘りでした。部落へ行つて野菜などもすな、各班で出合つて豚を買つたり、食べ物材料集めなどもするんですね。供出ではありません。

アメリカが来たのは三月の末頃からですね、あの時から塚掘りは止めておつたんです。そうして三日くらいして、首里の繁多川へ行きました。自分は上等兵で入隊しました。向こうには兵器関係が

だったので殺させてしまったという話が真栄里で話されたが、国吉ではこの話はない。もしこの事実があれば、そうして現在この女の人は存命だということであつたが、しかしこの人は心の疵が深く絶対にそれを口にしない、ということであつた。沖縄県民虐殺の真否を、間違いなく調べ上げねばならない一つの顕著な問題である。

答 「戦後糸満に来て遺骨収集の場合ですね、手もつけられない、アメリカのカバー(テント)を持って来てですね、円匙でまき取つてカバーに入れて納骨堂におさめました。」

答 「メーモーモイ(屋号)ですよ、一屋敷に七、八十名くらいいましたね、」

答 「あれはもう話しにならない」

答 「西がわにある屋敷ですが、あれも一屋敷に七、八十名くらいありました」

問 「西半分はそうすると、物凄く片っ端からやられたというわけですねえ」

答 「屋敷に人が余計集つていたら、女と子供は別にしておつたね、男は機銃で全部やつたそうです、見た人がわたしのところに連絡に来ておつたですがね。こういう状態であるといつて」

問 「その場合ほとんど避難民でしょうね」

答 「それからはもうほとんど避難民です」

問 「国吉部落の人はそうされなかつたのですか」

答 「字の人はほとんど防空壕に入つておるわけですから、直接の被害はほとんどないわけですが、避難民が結局やられておる

ありますので、その本部で伝令させられておつたんです。繁多川と第一線の中隊本部へ行くんです。場所と何中隊というては憶えていませんが、浦添の東南の方だつたと思うんです。夜に行きおつたんですよ。ほとんど毎晩です。部隊から兵隊が出て行く時は、またそれをつれて行つたりもして。向こうから負傷した兵隊をつれて来て病院へ送つたりもしました。これは十日間くらいでした。

それから与座に引き上げましたが、球部隊から六百名の防衛隊が来て、そこでいっしょに攻撃とか、手榴弾投げなどの練習ですな、これがすんだらすぐ第一線への伝令にまた首里へ行つて出ました、伝令は将校一人とわたしと二人で行くんです。大抵は道案内の役です。三日くらいは将校がいっしょでしたが、その後は、あなた一人行きなさい、といつて将校は行きませんでした。そこにいたのは一か月くらいですね。そうして五月十日に与座岳に引き上げて来て、二十日くらいそこにいたが、その時は、勝手に自分の家に帰ることができおつたですよ。家族と面会して与座岳に帰るんですよ。激しくなつて、道も何もわからなくなつたすな、山の中から通つて、また道を歩いたら飛行機が飛んでいるし、そうして民家にも攻撃して来おつたです。

それから解散前に、家内と子供二人が亡くなつておつたです。六月のはじめか、五月の末頃だつたと思うんです。それでその時に自分は、自暴自棄の気分になつてすな、また在郷軍人関係でもあるし、もう生きていても駄目だと思つて、残つた子供等を塚の上に来いといつて、みんな出して、そうして手榴弾で自決しようと思つて腹を決めていたんです。そうしたら父が水汲みに行く時に、ち

よっと危険だと思ったのか戻って来て、あなた手榴弾が何か持っていないか、と訊くので、わたしは持っている、こうこうしようと思っっている、自決しようと思をきめてる、それで子供等も集めている、といたら、子供等は助けてくれ、わたしが預かるから、止めてくれ、と言われて、ひとまず思い止まっていたら、その話を下の兄が聞いて、泣いてですね、それは取り止めてくれ子供等はわたしが引き受けるからというので、じゃ、あなたがたに預けるからといって出て行ったが、もうあれからは仕事も手につかなかったですよ。

そうして仕事も手につかなかったもんですから……、自分は中隊長と心安かったですよ。また沖繩がわの軍関係者が少なくてすな。その晩中隊長が呼んで、どうしているか、家族は全部生きておるかと言いますので、この間、家へ行って見ましたら、家内と子供二人死んでいました、と答えると隊長は「ああ、そうか、腹具合が悪いか、(許してやろうという気持を示しているように思われる)」と口実を考えてくれて薬を持って来させました。「あさって頃は解散命令が出るように思うているが、どう思うか」と中隊長が訊かれました。それでわたしは、「わたしは幼い子供たちがいてどうせ助かるとは思われませんので子供たちといっしょに死んだ方がいいんですよ」とそう申し上げたんです。そうしたら中隊長は「そうかね、その方がいいかもしれんね」といわれました。そんな話をしながら、それは夕暮れでしたね、それで水筒持って水汲みに行くといっで、自分の大事なものは持って出ようとしたら、今は危いから出るなどという命令がありました、いいえ、大丈夫ですからといっで出

その煙草で心が落ちついて、これは殺しほしないで立派な捕虜としてくれるなと思いました。

それから捕虜になって、豊見城の伊良波に収容所があったんです。そこでは、自分は、年頃もすこし老けておるし、通訳が自分の家内の親戚に当たっていたので、その人が教えてくれたんです。方言です、嘘を言いなさいと、そういっただです。通訳を通して調べる時に、「お前は防衛隊に行ったか」「いいえ、行かなかった」「どういう訳で行かなかったか」「わたしはちょうど病院に入院していたから防衛召集はのがれた」「年は幾つか」「年はもう兵役年齢はすつと過ぎたです」「どんな病気だったか」「結核であったが、病院が解散だったので自分のうちに帰って来た」「結核は今も持っておるか」「いいえ、わたしは医者ではないからわかりませんな」

結核といっただもんだから、アメリカの兵隊は、ハアバアハアバアで、この人だちといっしょに石川へつれられて行って、それで助かったと思うんです。

大 湾 朝次郎 (三十六歳) 防衛団長

わたしはですね、戦争前は、沖繩には防衛団というのがありました、村の防衛団の副団長をしておったんですよ。昭和十九年までですね。この防衛団は戦争の終るまでその組織はあったわけですが、その戦争の激しくならない前までは、わたしは防衛隊は免れていまして、学校を卒業した若い青年たち四、五名と、五十歳まで

ました。そうしてそれから子供たちのところにずっと帰って行っておったわけです。夜は御飯炊いて食べさせて、朝は早く起きて、そうして捕虜はみんなといっしょだったんです。

捕虜は部落マタという自然壕で、大湾さん(同席)の東がわで、そこにおったです。はっきりした日は憶えていませんが、アメリカの斥候兵が来たんです。部落です。

話は後戻りしますが、わたしが隊から来る時には、アメリカ兵が南山にテントを張ってあるんです。ちょうど国吉の後に山がありますよ、学道の割り取りのところに銃を構えて見張りしておりましたよ。それを見て、ずつと東がわの畑の溝からすな、自分は見られないように匍って、暗くなってから自分の部落に入りましたが、その入る手前に友軍の兵隊が甘蔗の中から三名出て来おったです。それが一人は将校だったですよ。それで自分は軍服着ているし、見られないように隠れておったですよ。そうして三名とも部落の中に入って行きおったんですが、それからどこへ行ったかわかりませんでした。兎に角、部落に来てから壕に入って子供等といっしょになつて。そうしているとアメリカの先発隊が来て壕を捜がしてしまいました。その時の気持は何ともいえませんでした、出て来い、出て来いといっで、自分は軍役関係もあるし、いよいよ死ぬんだなと思いました。またあとから、みんな出て来いといっで、自分等は後ろになつておったんですが、どうとう出て行つたんですよ。慣えるような気持がしてすな、もう向こうのいうことも耳に入りませんでしたよ。髯もボウボウ生やして、汚い着物を着ておったんです。軍服は脱いでしまつて、それから煙草を一本ずつくれたから、

最後の防衛召集に行かれたもんだから、六、七名の若い人たちと防衛関係にたずさわっていたんです。殊に夜なんかは。その当時は、特に、スパイ、スパイと喧しかったもんですから、これは十九年の九月頃からです、わたしは村防衛団の副団長という関係で、警察にも集まっていたから、よく憶えておりますよ。

スパイというのは、ほんとのスパイは激しくなつてからではないかと思いますが、知らない人、初めて見る人が、道から歩きながら紙切れと鉛筆で字を書いているものはすべて、スパイ疑いで捕らえるという命令でした。それから十九年の十一月頃から、こういうものをあなた方が処理できない場合は、軍に届けなさいという命令があったんです。大隊本部もありましたので最後にあそこへ連れて行くことになつておったんです。それからちよつと頭の足りない人がおるでしょう、そんなものまでつかまえて連れて行かれましたが、そういうのも多かったですよ。住民がスパイといっことは全然できませんがね。知らん人が来た場合にはといっことで、やかましかったですよ、スパイの問題は。

それから二十年の年も明けて、三月二十四日、前の山まで南の山から弾がバンバン落ちて来て、破裂するのをわれわれは見ているんです。港川方面からではなくて、南の方から弾は来たですね。そうしたら軍の方から、子供と女、老人は全部国頭の方に避難せよ、といっで、うちの子供たちも大宜味の方へ送ったわけですがね。車は軍から出すからといっで、高嶺の製糖工場敷地まで連れて行って、そして嘉手納までは軍の車で行って、あそこで降りて、子供たちも年寄りも歩いたんです、津波の山の中まで。わたしは

五十三名が連れて行つてですね、一応あつちで手つづきもして、大宜味の小学校からお米も馬車で運んで来て、一通り配給して、三月二十九日の五時頃か、大宜味の山を出発して、昼中は歩けないから夜歩いて、二晩にこつちへ帰つて来ましたがね。

三十一日の晩通つて来たですから、四月一日上陸でしょう、もう石川なんか来た時は、兵隊が全然通さない、もう敵の上陸に対する準備だからというて。石川の橋なんかわたしたちがそこへ着いた時に破壊してはいたです、友軍の兵隊が。それでわたしは、こうこういう理由があるから、ほかの人は通さないでも、わたし一人は通してくれというて、わたしといっしょになっていた五名は、自分の部落に帰つて来たですね。先生方なんかは、通れなくて引返して大宜味の山に帰つてですね、却つてわたしたちの心配をしていたらしいんです。

その後ですね、あの部隊からもこの部隊からも、部隊といつても、中隊もあれば大隊もある、連隊本部もある、また小隊からも部落へ命令するんですよ。部落からの労務です。夜、第一線へ弾薬を運ぶとか、地雷を運ぶとか、食糧を輸送するとか、使役者を今晩何名出せと来るんですよ。それで一番うるさかったのは、どこの部隊かと訊いた場合ですね、今の非常時にそんなことは訊かなくてもいいというんです。こんなにはつきりしない時は、わたしは非常に困りおつたんです。どこの山だからと、いってこれくらいはわかりますがね。それについてわたしは、小隊長や中隊長にお願いしおつたんですがね、わたしは支那事変の死にこないで兵隊のことはよくわかつてるので、将校だからといって頭からガミガミ押さえる時

は、わたしはね返したんです。こういう命令はない、といつて、そういう立場で、あの部隊この部隊と対抗して、戦争を勝ち抜くためだからといつて、雨の日も風の日も頑張つて来たわけでしたがね。

それから首里の戦線を突破されて、アメリカが兼城あたりまで来た時ですがね。今度は最後の立退き命令だから、住民は全部具志頭・玉城の方へ行きなさいという命令がやつて来たんですよ。

それでわたしは自分の考えで、こんな小さい島で、敵がこつちまでやつて来て、今から玉城に行けといつたつて、土地は狭いし、壕もないし、向こう行くまでにはどうせ道に倒れるから同じ死ぬならわれわれ部落民は、部落で死なした方がいいから、わたしはそういう命令は受けませんとはつきりことわつたんですよ。そうして壕を廻つて、知念・玉城への立ち退き命令が来ていますが、みなさん方どう思いますか、と訊いたら、女連中は泣いてですね、もう今からどこへ行くか、どうせ死ぬなら自分の部落で死んだ方がいい、という意見が多かつたんです。それでは共に部落で死にましようといつて、部落に最後まで残つておつたんですが、この戦線で約一週間ぐらいは激しかつたんですよ。五日目くらいまでは特に激しかつたんです。夜でもそう出られなかつたんですから、激しくて。アメリカの戦車をここの部落近くで七つくらい破壊してあつたんですか。

激しくなつてからは自分たちも壕に入つて、その壕でいっしょに生き残つたおばさんが来ると当時の様子を話すのに都合よかつたんですがね、ちよつと遠慮しますといつて来なかつたようですが、最

初はげしくなつてまでも、わたしは自分の個人の防空壕にいましたかね。友軍の兵隊が駆けつけて来て、なぜあな方は今までここにぐずぐずしているのかと喧嘩ごしにぶつつけて来たので、わたしは、なに自分の個人の防空壕に住んでおるのであつて、あなたがたが、そういうことを言わんでもいいではないか、といつたら、いや

民間が戦争はできないから、われわれは壕に住んで最後まで闘う、というので、壕に入つていて戦はできないからあなあなたがたは壕に入る必要がないんだから、そとで闘いなさい、壕の中では戦争はできない、とわたしがそういつたら、手榴弾で殺してやると兵隊たちがいうたんですよ。それで、何を言っているか貴様たち、僕も支那事変の死に損いだから戦争しては貴様たちには負けないぞ、と手までは出しませんでした、もう少しのことで殺し合ひしましたよ、わたしも死ぬ覚悟をしていましたから。それでどうとうこの兵隊さんたち二人はわたしに負けて去つて行きました。その後、あまりアメリカの斥候兵が部落をまわつて歩くもんですから、他の壕へ行きました。そこには二十八名が入っていましたかね。そのような自然壕は三つありますが、ぎっしり入っていましたからね、われわれの入っていた壕は、兵隊も三名入つて来て、それから神谷良一君も来ていましたかね、兵隊さんは切り込みに行くというので、それではわたしが道案内しましょうといつて、神谷良一君がいっしょに行くという。もう戦争は最後だからしばらくひかえていなさい、とすすめたが、わたしも軍籍にある身だからあれたちといっしょに行つて、できるだけのことはやつて来ますから、後を頼みますよ、といつて、出て行つた。この神谷良一君はそのまま帰つて来ないん

ですよ。それたちが出て行つてから一時間半くらいしてから戦車を破壊する音が聞こえましたよ。

この神谷良一君は出て行つて亡くなつていますが、これが出て行かなかつた場合はその壕に入っている人たちは自爆の覚悟はしておつたんですよ。この良一君とわたしと二人がおりますから、手榴弾までも準備していました。そうすると、アメリカの斥候が来て手榴弾をぶち込んだり、毎日来てそうするもんですから、それでいくらか怪我人は出ましたが、そう大勢の怪我人ではありませんでしたからね。もしもこの良一君がここにいたら、われわれは自爆していいですよ。半分は良一君が、半分はわたしがといつて、手榴弾をちやんと用意していましたが、しずおばさんですよ、あれが来たら、あれはいっしょでしたから、その時の事情がよくわかりましたかね。嘘でないこともはつきりしましたがね。

それでわたし一人になつたもんですから、わたしも考えて、わたし一人でこれだけの人間をどうしても処理できない、と口からは出さなかつたが考えていたんですよ。そう思っている時にわたしの家内のお父さんがですね。「どうせこうせ死にはするはずだが、一時間でも長く生きることにはしようではないか」、という意見を出されたんですよ。「出されて捕虜されて殺すなら殺されてもいいんだから、壕で自爆するよりは、まず出て殺されるようにしよう、わたしはそう思うが、皆さんはどう思うか」、わたしの家内のお父さんが、そういうことを打ち出されたわけですよ。わたしも自分一人でこれだけの人を処理できないと思つていたので、今度アメリカ兵が来たら手を上げて出ようといつたんですよ。そうしたら、女の連中が却

って壕の中で早く死んだ方がいい、と聞いていました。壕の中には子供もいまして泣きもしましたが、アメリカさんにはわかっていたんですよ。出て来い出て来い、と聞いては手榴弾を投げいましたが、毛布なんか布団なんかでいつも防いでおりました。

そうして最後になって六月の十八日に壕から出て、そうして、捕虜されました。捕虜されたのはいっしょでしたね(同席の神谷さんへ呼びかける)。

伊良波へつれられて行って、わたしは防衛隊であるということで見離されて金網の中に男ばかり入れられて、神谷さんたちは家族といっしょで、別べつにされました。

壕内の自爆の話は、この方もいっしょでした。手榴弾は二人七発ずつ持っていました。手榴弾はいくらでも手に入りました。

神谷英一(十八歳) 第三次防衛隊

われわれが召集されたのは二月の下旬、二十六日だったと思うんですが、旧兼城村の潮平の南東の山に陣地があったが、そこに集結したんです。最初は「球」だったと思うんですが、はっきり記憶はないんです。そこに十日間いたがわたしは伝令勤務でした。第三次防衛隊がこの山の陣地に集結したが、防衛隊で伝令はわたしと他に一人と二人だったんです。よく師団本部の与座岳へ行きおっただんですが、真栗里へも行ったり、宇江城へも行ったりですが、また兼城へも行った。そこに十日くらいいて、それから東風平村の世名城へ。そこでもやはり伝令勤務でしたが、そこには三、四日で、それから

にいっぱいしてしまいました。あの頃までは、住民が世名城にもいました。それでわれわれが、首里は撤退して兵隊も下るので南へ下った方がいいと伝えましたが、住民の方でも聞いていたようでした。われわれが南部に下る一日前と思うんですが、アメリカの空輸部隊ですか、東風平に、食糧など落しているのをよく見ていたですよ。その日にアメリカの兵隊に世名城が占領されたというので、わたしたちも部落内の小さい壕にいたんですが、そのまま逃げて行っただんですがね。

伊敷へ下る時、山崎という分隊長、伍長でしたが、いっしょに下りましたが、自分の部落を通りますので、うちに寄って家族に会いましたら、ゼンザイなんかをつくって、いっしょの防衛隊も食べたりしました。その頃は、まだこの辺は艦砲も大して来ませんでした。伊敷へ行って見たら、どこへ集まるのか、集まっていけないものもいるといっただくあいで、ちりじりになっているんです。われわれを引率して行った兵隊もどこへ行ったかわからないんですよ。それでその翌日、部落へ帰って来たんですよ。

自分の部落に帰って、家族と同じ壕に入っておいたら、部隊からさがしに来ているんですよ。それは国吉に集結せよというのを伊敷といっただくあいで聞かされたんですよ。自分等の部隊が国吉の後の三四七五部隊の伊藤部隊というのですがね、行って見たら防衛隊が相当集まっています。伊敷へ行って見たのが、そこへ来ていたんですよ。

自分はその中でも伝令勤務を命じられていましたが、伝令勤務中に、胸部を負傷して、倒れてですね、それで病院へつれられて行っ

豊見城村の長堂です、向こうには弾薬倉庫があって、その配布係りで各部隊から取りに来たですよ。それでわたしは弾薬の分配ばかりしておったんですが、そこには一か月半くらいいました。

艦砲が始った頃は、そこにいたんですが、激しくなってきたら、昼は弾薬運びに来ない、またあまり夜が更けてからも来ませんが、運ぶのは輜重隊の兵隊で、兵隊といってもすべて防衛召集されたあたり前の民間人ですが、馬に荷をひかして来ますが大抵は二人で一組でした。暇の時はわたしらも小隊といっしょになって第一線に運んでいました。

首里の戦線から下るといっ情報で、あなた方も南部の方に下りなさい、という命令があって、南部へ下りましたが、その頃負傷兵が喜屋武をさして下りおっただくあいで歩いています。びっこを引いて行くのもあるし、人の肩に掴って行くのもあるし、その頃、自力で歩けるものは下れという命令があったんですがね。うちの壕にも、歩けなくて助けてくれと来るのもおりました。五月の十五、六日から、引っこりなしに下っていました。

うちらが向こうから去ったのが五月の末だったと思うんですが、東風平廻りでした。東風平へ行く途中、道を通りながらですね、坐って部隊が休んでいるような形でしたが、そばへ行くと坐ってはいませんが、死んでいるようなさういった兵隊も絶えず見ました。

それでわれわれは、世名城の旧陣地に帰って来て、四、五日いたと思うんですが、そこでまた、真壁村の伊敷に集結するようにという命令が下りました。世名城に帰って来てもわれわれが入る壕はなくて、小さい壕をさがして入っておっただくあいで。その頃は住民が壕

で、それから後は、兵隊のそうした勤務にはつかなかったわけですがね。その負傷したのが六月十二、三日ですが、病院といっども、部隊の医務室です。迫撃砲で胸部をやられたので担がれて行っただくあいで。

国吉には軍の手持ち米が置いてありましたが、それをアメリカに燃き払われて、防衛隊が食糧を苦面しました。いくらか米が部隊にありましたので、それを少しずつ食べるのですが、それは鶏の卵くらいの握り飯を一日に一個ずつで、わたくしも働くことはできませんでしたが、一個ずつ貰って命をつなぐことができました。それはとてもみじめなものだったんです。

部隊長は、仕事のできないわたしのような負傷者は、ほんの鶏卵くらいの飯も惜しかったんだと思います。拒介者扱いで壕の奥のジメジメしたところにいさせられていましたから、寒くて堪えられませんでした。着るものもない裸みたいなのですから我慢ができません、食糧あさりに行っただくあいで帰るまで、炊事場へ行って火に当たっていました。それで炊事班長なんか、あなた方は何もできないのになぜここに来るか、何かさがして自分で食べたらいいではないかということもありました。

それで拒介者扱いされてここにいっても仕方がないから、という判断で、わたしの友人がいっしょですよ。こっから出て自分の部落へ行くとうことを話していました。この人は旧兼城村出身で商業学校を出ていましたが、いっしょに出たわけです。それが八月の初旬だと思んですが、その頃からそういう話が出ていたんですよ。日本は沖縄戦で負けているから、食糧もないから二、三名ずつ

組をつくって、国頭へ突破しなさい、という命令ではないが、そういうふうには話があったんですよね。それで自分等は、そんなことから部隊から出ていかまわらないだろうと出たわけですよ。

それから、部落へ行ったらお父さんやお母さんたちがいるだろうと思っただけなんです。部落に行ったら誰もいないんですよ。兼城の人も自分の部落へ帰って、わたしはわたしの部落に帰ったんです。結局この大湾さん（同席）の東がわに防空壕があるんですがね、食べ物や水をさがして生きようという考えであったと思うんですが、食い物をさがして食べたんですよ。

山からこっち来るまで、兼城の人は怪我といっても大したことはなかったんですが、わたしは胸部をやられているので、呼吸が苦しかったんですけどね、部落の裏で距離にすればいくらもないですが、せいぜい二百メートルくらいですが、向こうから陣地を出たのが夕方の日が暮れてじきでしたから時間はまだ早いです。ところがこっち来るまでは、明け方の四時頃になっていた。休み休み歩いて、山も道という道もないんです。元気な場合なら十分もあればいい距離です。

それで壕へ行ったら、一升瓶に水も詰めてあるし、また砂糖もある、自分で飯を炊いて食べるという考えもないわけです。昔芋でつくった澱粉があったんですね、これが防空壕にある。わたしは、来て四、五日は、この澱粉と砂糖に水を入れてかき交ぜたのばかり食べて、そのほかには何も食べませんでした。自分で物を煮て食べる気力もなかったんです。

それから四、五日ばかりしたら、大庭軍曹という方がたが三名、に行きました。照屋の方から、国吉の後の方の壕へ地雷も運びました。弾薬運びや地雷運びは、班長が、今日はどこに行きなさい、今日はあっちに行きなさいといつて、軍の方から何人出なさいといつて通知して来て、班長が命令して出るんです。

米搗きや炊事や弾薬運びは、長い間でした。わたしは子持ちではなかったのですが、いつでも作業や動員に出されました。それはいつかはじめたか日はよくわかりませんが、敵が後の山に来る筈といつて、毎日やっておったんです。

真菜里へ行く時に照明弾が上って、取りに行くことができないで戻って来たこともありましたが、兵隊が首里へ行って艦砲が激しくなつたから動員は休むようになりました。

神谷エイ子さんと壕はいっしょではありませんでした。捕虜になつたのは、隣の壕でありましたが、いっしょではなくて、一日は後さきになって出ました。わたくしたちが先きでした。

弾を運んで来るところは、部落の後の山の中に持って来るところです。地雷は照屋の方から国吉の裏の穴の中へ持って行くんです。部落の小さい道のそばに穴がありましたので、それに持って来ては積んでおりました。

高良の方での弾薬運びは、高良の近くから高良の方へ運んだんです。照明弾が上る時は、匍つて、それが消えたら歩きました。

神谷 エイ (二十八歳) 家事

わたしは十二月生れの、三か月になる子供と数え年三歳になる子

わたしをさがして来て、この方がたも国頭へ突破するという考えがあったんですが、この方がたが来た翌日、アメリカ兵が来て手榴弾投げ込んで、一人は怪我しました。その時大雨が降ったので米兵は帰って行きました。大庭軍曹がたは、三日ばかりして出て行かれて、わたし一人だけ壕に残っていました。

雨が降って今までの壕にいられなくなったので、部落の北がわの他の壕へ移っていたら、そこへ与座の青年が来て、二人でいたら高射砲隊にいた中尉がやって来ました。この人は片手がなかったが、この三名でいると、われわれの伊敷隊の兵隊で、国頭へ突破しようとしたのが米軍に捕えられた。それは宣撫班になって来て、日本は負けて、降服しているから、兵隊も民間人もみんな出なさい、とスピーカーで呼ぶんです。また夜になったら、みんな壕から出て連絡もできました。それで八月二十九日に壕から出て捕虜になりました。

その時捕虜になった人はトラックの十五台でした。兵隊も民間人も、有名な大佐もいるという話がありました。

註、満十七歳の少年兵であることで神谷英一さんの記事は特徴がある。

神谷 シズ (二十九歳) 弾薬運搬、炊事

はじめのうちは、部落の後で、壕から出て、昼は炊事をやって、米搗きなんかもして、弾薬運びは真菜里の方へ行ったり、照屋へ行ったり、激しくなつてからは、高良の上というところにも弾薬運び

供と二人連れていましたから、御飯炊いて来たり、お手を畑に行つて取って来たりする間は、この三歳の子供を隣りのおばさんに預けて行きました。四月頃だったんですがね、兵隊さんが、激しくなつたから、負傷兵がこの壕の中に入つて来て、「お前たち子持ちは子供が泣くから出て行け」といわれて、追いつ出されました。この兵隊さんたちは、一人で三人は坐れるくらいの場所を取って、子供が泣いて泣いたら敵が来るよというて、出て行けと脅かしましたから出ました。こっちに脂も澱粉もお砂糖も置いてあるのを全部取られて、ここから追い出されたから、水とお砂糖を交ぜて炊いて食べるのを少しは持っていました。これが無くなつてからは、水ばかり飲ましていました。昼は木の下や、個人の壕にいさせて貰ったりして隠れていましたが、この三つになる子供は、話がよく聞き分けてくれました。「お母さんといっしょにそとへ出ると命がなくなるよ」と話したら、はい、はい、といつて昼中、このおばさんたちと遊んでいました。また夜になると恐いから、叱られても入つて行つたりして、こんなにして暮しておりましたが、大変激しくなつてからは、「あなたたちが、こんなに入つては出たり、出ては入つたりしてはこっちに艦砲を撃たれるから、もう来ないようにしてくれ」といわれて、大変叱られました。それで後は、「こんなにして生きるよりは三人共死んだ方がよいよね」といつて木の下で泣いたり、個人の壕にもぐり込みして貰つたりしましたが、弾は一発も撃たれませんでした。このように苦しい目にありましたから、自分は、こんなにして生きていくよりは、何か人のことを少しでもやって上げた方がいい、

と考えました。それで年老いて歩けない水の汲めない人には水を汲んで来て上げたり、またお産してお襦袢を洗えない人のお襦袢を洗って上げたり、怪我して、黄燐弾が撃たれたりした人のお粥を作って上げたりした。どうせ自分は死ぬんだからと思つて弾の中を歩いたが、自分は弾一つ当りませんが、その時はまだ斥候が来ない間でしたからほかを歩いて捕虜には取られませんでした。

捕虜される六月になってからは、木の下に寝た。親類のおばあさんが、これは（子供たちが）穴の中に入れたら死ぬからといつて、木の下に寝かしてありましたからこのおばあさんといつしよに寝て、いました。弾は木の下にも人の家にも落ちましたし、国吉の後の池には大変大きい爆弾が落ちておりました。家のそばに爆弾が落ちた時は親子三人土に埋められまして、わたしは生きていますなどわかったが、子供二人は死んだものと思ひました。しかし子供たちもなに事もありませんでした。このうちが無くなつてからまた叱られても嫌の中へ行きました（鼻声になる）。兵隊さんたちは、お前たちのためにみんな命奪われるよ、とやっぱいいました。食べ物も全部取られて無くなっていました。着物も隣の防空壕へ行つて取つて来て着たりして、昼は出されてこんなにして暮していましたが、夜はまた恐いんですから入つて行きました。

六月二十三日でありましたが、わたしは親戚のおばあさんに水を汲んで来て上げて、おばあさんは、まだ生れて半年しかならない赤ん坊はおしこしたので裸かにして、手枕させて、寝かしておりましたが、軍用犬が来ました。お婆さんは、呼吸をしたら咬れるからと思つて、じつとしていました。鼻のそばから被うている布を捲

くつて、ワンワン泣いたので、兵隊さんが拳銃をつきつけた。アメリカの言葉はわかりませんが、このおばあさんをお前担きなさいといつて負わされてまた子供は抱いて、捕虜の列までおばあさんをつれて行きました。

それから伊良波というところに行きましたが、この子供は伊良波で二日間裸で、そこにいた間裸です。それから山原の古知屋というところでも、この子供は三日間まる裸、自分も着るものはない、後で米を配給するところへ行つて、メリケン粉の袋を買つて、これに手が出るように穴をあけて、その中に入れて寝かした。「生きている子供のようにはないね」と思ひました泣く。この子供はもう駄目だと思ひましたが、五十人余りの後にほんのちよつと、小さい罐詰の空罐に牛乳を貰つて、飲ましてこの子の命は助かりました。

また三つになる子も命は助りまして、今は三人家族幸せでいます。お粥を食べさせていた子はほとんど亡くなりました。わたしが捕虜を洗つて上げた人は弾に當つて亡くなりました。

主人は、八重山徴用で、やはり戦争のために亡くなりました。親戚のおばあさんも捕虜になつてから亡くなりました。

ほかの方では昼は壕に隠れて、夜出て食糧がしなりましたようでありますが、国吉は事情がちがいます。おじいさんやおばあさんなどが、家にいる方がいるんですが、家に爆弾が落ちて人が死んだところも多いので、夜そとにいるのは恐いのです。わたくしたちの壕は、兵隊に全部取られたので、隣の班の壕に、夜になったら行くと、子供がいるのはわたくしだけだから、みんなが、子供が泣くと

大変だからといつて出て行けといわれるんです。そうして、食糧は全部兵隊に取られて、食べるものがないので、昼さがしに行つたんです。

そとの方はあちこち、大勢人が死んでいるので恐くて出て行けといわれても、また何とか言われると思ひながらも壕へ行かねばならなかつたわけです。